

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## Sobre "El árbol de la ciencia" de Pio Baroja- II

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1967-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 榮一, Kimura, Eiichi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2221">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2221</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# Pío Baroja: El árbol de la ciencia について—II

木 村 栄 一

前稿（神戸外大論叢，第17巻，第5号参照）では，この作品を形式の面からとりあげて，その叙事的な，ナラティブな性格についてのべた。本稿では内容的な面について多少詳しく検討を加えてゆくつもりだが，それに先だつてこの作品をよりよく理解する意味から，その周辺のなものにふれておきたい。

El árbol de la ciencia「知恵の木」が書かれたのは1911年，作者が39歳の時で，すでにその時までには彼はこの作品を含めて一編のエッセイと，十八編の小説を書いている。これらの小説は，処女短編集 *Vidas Sombrias*「暗い生活」（1900年）を除いて，すべて数種の三部作に組みこまれている。前稿と本稿においてとりあげている「知恵の木」も，*La dama errante*「さすらいの女」（1908年），*La ciudad de niebla*「霧の都」（1909年）と共に，三部作“*La raza*”「民族」を形成している。Baroja の三部作のうちには，その内容的関連という点からみて，結びつきが弱いと考えられるものもあり，この「三部作」も一見すればその感をまぬがれえないかに思われる。Eugenio G. de Nora はそのことについて，次のように指摘している。「このみせかけだけの三部作で，またもや我々は僅かに二つの小説的な結構を見出すにすぎず，それらがまた相互に極めてかけ離れたものであるため，幾人かの副次的な人物のつかの間の再出以外に何らかの関連を認めることは困難である。<sup>(25)</sup>」実際に，これらの三作品を比べてみれば，「さすらいの女」，「霧の都」がそれ

---

(25) Eugenio G. de Nora: *La novela española contemporánea*. Tomo I. Pág. 166; Madrid. 1963. Edit. Gredos.

ぞれ一応は完結した内容をもちながらも、続きものになっていることがわかり、また前者はアナーキストのテロ事件にまきこまれた父娘が、官憲の目をのがれてポルトガルからロンドン行きの船にのるまでの逃亡生活を描き、後者は父娘のロンドンへの逃亡後の物語りとなっており、内容的にもかなり起伏の多い、波瀾にとんだいわばアクション・ドラマ的な性格をおびている。ところが一方、「知恵の木」は十九世紀末葉から二十世紀初頭にかけて苦悩にみちた生涯を送った一人の知識人を主人公にしている点、さらにその主人公を通して、作者自身が自らの思想を積極的に表明している点などで、先に挙げた二作品とはかなり趣を異にしている。それ故、先の引用文において指摘されていたように、この三部作は全く異った二つの小説的な結構を備え、しかもこれら三作品においては副次的人物の再出以外に結びつきが認め難いということが諾えるように思われるが、もう少し詳細に検討を加えてゆけば、やはりこれらの三作品では、伏線的ではあるが、「民族」がテーマとして扱われていることがわかる。

先の続きものになった「さすらいの女」と「霧の都」のうちの後者（第二部、第十六章“La raza cansada”「疲れはてた民族」）において、主人公 Maria は想いを寄せていたポーランド人 Vladimir から手ひどい裏切をされ、打ちのめされる。Maria の失望落胆があまりに甚しかったので、彼女の友人 Natalia は Maria の父の友人 Iturrioz にその理由を尋ねるが、その時 Iturrioz は次のように答えるのである。

『それに我々はすでに老境にある、我々の民族はあまりにも長く生き、骨の髄まで衰え果てている。

……  
我々南方の人間は、根気のいる、たゆみない、いろいろな仕事を押し進めてゆくことが出来ないのだよ。それは先ず、民族が疲れ果てていて、我々にまで受けつがれて来たあの豊かな生命力が枯渇してしまっているからなのだ  
(26)  
……』

---

(26) 註(3)に同じ、Pág. 439.

先にも述べたとおり、「さすらいの女」においては、アナキストのテロ事件にまきこまれた父娘の逃亡生活、「霧の都」ではロンドンでの父娘の生活が描かれているが、この二作品を通じての Maria は勇敢で、忍耐力を備えた、ある意味では男性的な雄々しい性格を持った女性として描き出されている。ところが、後編にあたる「霧の都」の結末近くで Vladmir の裏切り行為にあって、それまでみせていた雄々しく、粘り強い性格とはうってかわって、ひどく力をおとすのは意外な感じがしないでもないが、Iturrioz の「(我々の)民族は疲れ果てている……」という言葉は、雄々しく粘り強い主人公 Maria も「疲れ果てた民族」のかげりを内に秘めていたことを、はっきりと示している。すなわち、これら二作品を通じて、主人公 Maria は「疲れ果てた民族」を象徴的に表しているのである。(しかし、これら二作品はすでに指摘したように主人公の波瀾に富んだ生活に重点がおかれ、いわゆるアクションドラマ的性格をおびており、上記したように結末近い章での Maria の失望落胆と、Iturrioz の言葉はつけ足しのような感じがしないでもない。)

一方「知恵の木」をみれば、真正面から民族について述べられているのは、セム人とイベリア人との比較についての部分であるが、これは断片的なものにすぎず、作品全体における比重という点からみても取るに足らないものである。むしろ、はっきりと民族に関連させて述べられてはいないが、主人公の全体的な像から「疲れ果てた民族」のかげりといったものが強く感じられる。彼の厭世的で、行動力を欠いた性格等は先でのべるように「民族」とは異った面から説明されうるが、その全体的なイメージは「疲れ果てた民族」にぴったりと一致している。前に「民族」が、これらの三作品では伏線的ではあるが、テーマとして扱われているといったのは、上に述べてきたことに由来しており、また作者がこれら三作品に「民族」というタイトルをつけたことを無に帰せしめないという意味でも、このように考えて妥当ではないだろうか。

以上に述べてきたような、伏線的テーマとしておかれた「民族」の他に、

この作品はもうひとつの大きな特徴を備えている。それは自伝的な要素である。いやむしろ、作者が主人公を通して自己の内面をさらけ出しているのだ。すなわち、この作品の主人公の生涯の外面的な事件の多くが、単に作者の生活と共通しているということではない。(その意味からみてゆけば、ごく大雑把にいて第五部“La experiencia en el pueblo”「村での経験」くらいまでが重りあっているとしか推定できない。) Eugenio G. de Nora の言葉を借りていえば、「……98年代の申し子バローハの(すなわちアンドレス・ウルタドでありうる作者の「もうひとりの自分」の)(ほとんど「全面的な」)告白<sup>(27)</sup>」ということなのである。

試みに、「知恵の木」の第一部と、作者の回想録“Desde la última vuelta del camino”「最後の折返し点から」の第2巻, “Familia, infancia y juventud”「家族、幼少時代および青年時代」(1944年)の第五部“De estudiante de medicina”「医学生時代」と比べてみれば、上にのべたことが一目瞭然とする。主人公が医学生であるという状況設定が作者自身のものであるし、その主人公を通してなされている祖国スペインへの痛烈な批判、医学生の時に授業をうけた無能な教授達に対する痛罵等は、そのままの形で上記の「回想録」の中にみられるのである。また、主人公 Andrés Hurtado を描く上で非常に重要な部分である第一部の主人公の内面描写が、作品の原文の三人称形を一人称形にかえただけでそっくりそのまま上記の「回想録」中に収められている。こういった点を考えあわせれば、この作品の主人公 Andrés Hurtado が、小説世界における作者の分身であることには疑問の余地がない。

Baroja のように、主要人物のイメージを作品の導入部や前半の部分で与えておいて、その人物にのっとって事件なり、挿話なりをつないで物語を進めてゆくという伝統的な物語り作家の手法を踏しゅうしている作家にとっては、この作品の第一部における主人公の人物提示が決定的な意味を持つことは明らかである。この点に特に注目して、Angel Valbuena Prat も「……『知恵

---

(27) 註25に同じ, Pág. 170.

の木』という作品は主人公中心の小説で、その中ではこの人物がひとつの著しく主観的な、思想的には自伝的な性格を表している。少くともこの作品はパロージャ自身であり得た人物の小説である、……」<sup>(28)</sup>とのべているのであろう。作者と主人公 Andrés Hurtado との間に相違があるとすれば、それは前者がすでに学生時代に、自らの情熱の対象として文学を見出ししているのに対し<sup>(29)</sup>、後者はそれに相当する生きがいとなるものをどこにも見い出せず、僅かに、Lulú という女性のうちに自己救済の可能性を見出したにすぎない点であろう。そして、このような広範囲にわたる作者と主人公の重り合いが、結果的には「知恵の木」という小説の文学作品としてのひとつの限界となっている。このことについては、また先で述べることにする。

この作品を書くまで、作者はこれほど自己告白の色濃い、自らの思想を露わにした作品を書いてはいない。(1917年になってようやく自伝“Juventud, egolatría”「青春、自画自賛」が現われる)。そのような意味からしても、この作品が Baroja の初期の作品中でひとつの特殊な位置を占めることは疑いない。

以上にのべてきたように、この作品は伏線のテーマとして「民族」を持ち、また主人公が小説世界における作者の分身であるという性格を備えている。そこで、これから主人公 Andrés Hurtado の性格および思想についてみて行くことにするが、そのことによって恐らくこの小説のもつ様々な問題点も明らかになってくるはずである。

主人公 Andrés Hurtado の全体像を眺めてみれば、彼の母がナバラ人のせいもあるが、北方人的な色彩が色濃く表われているのに気づかれよう。すなわち、瞑想的で、孤独を愛し、独立心がつよく、うわべはひどく気むづか

---

(28) 註(7)に同じ Pág. 487.

(29) 作者は「回想録」中の“Familia, infancia y juventud”の第五部“De estudiante de medicina”の中で次のようにのべている“La afición literaria y el deseo de escribir empezaban a prender en mí. Sugerencias de diversas clases alimentaban este afán mío de emborronar cuartillas.”  
註(2)に同じ, Pág. 584.

しいが内にやさしい心をひめた人物なのである。しかも、そういった気質的な先天的要素に加えて、十九世紀末葉に青春時代を送った人間として当時汎ヨーロッパ的なものであった世紀末思想の影響をうけており、それに医学生時代に悲惨な状態にある患者達を目のあたりにした経験とが絡み合って、彼に厭世的で愁えげなかげりを帯びさせている。同時に、この作品は作者自身の思想、告白を多分に含み、Azorín をして「『知恵の木』は他のどの作品よりも、パローハの精神をよく要約している。その随所に、我々の芸術家の感受性、文体、哲学がはっきりと読みとれる<sup>(30)</sup>」といわしめたものだけに、作者の思想がはっきりと表明されている。殊に第四部“*Inquisiciones*”「審理」は、作者自身の抱いていた思想上の問題をそのままぶつけているのではないかと思われるほどである。そのことから、この作品がある抽象的命題を小説的に転化したのではないかとも考えられないことはないが、第四部が作品全体から浮上ってしまっている点からも明らかなように、必ずしも充分に抽象的命題が小説中で肉化されてはいない。この点については先で触れることにして、まず主人公に焦点を合わせてみてゆくことにしよう。

この作品を読んで、我々の心に浮んでくるのは、彼の無為な、自己を没入しうる対象をもちえなかった人生である。主人公にとって大切な時期に、いつもくり返されるのは（彼の自問、叔父 Iturrioz, Lulú の質問たるを問わず）、「何をなすべきか」という疑問なのだ。確かに Madrid での学生時代には医学が、哲学への関心が、読書があった。Alcolea の嘱託医の時は医師としての仕事があり、その後の Madrid での生活でも、医師の職をもっていた。Lulú との結婚後は翻訳にわずかな生き甲斐を見出ししていたことも事実である。だが果して、彼は何に、どこに自らを託しうる対象をみい出したのだろうか。Lulú 以外のものに、彼は何ひとつとして自らを託しうるものを見い出せはしなかった。

学生時代の主人公は、ある病院の性病の講座に出席して、そこでの患者達

---

(30) 註(4)に同じ, Pág. 639.

の悲惨な姿を実見し、また丁度その頃に親しんでいた Schopenhauer の著作からの影響もあって、次のような考えを抱く。

「無為と、一切が空しく汚れ果てているのではないかという疑念にひきずられて、ウルタドはますます厭世的な気分におちいていった。

彼は愛情と慈悲とを底にひめながら、何ら実際的な解決策を持ちあわさない、虚無的な感情へと傾いていった。

このような観念の動揺、計画性と抑制の欠除とが、彼をはなはだしい混乱と、断え間ない無意味な、頭脳の異常な興奮へとひき込んでいった。<sup>(31)</sup>

彼のこのような観念的な傾向は、Lulú との結婚に至るまで変わらず、彼は常に現実とかげはなれた次元にあった。それゆえに、結局は現実的な次元においては彼の「何をなすべか」という疑問は、残されたままであった。その後、真理が現在は役に立たないものだが、いつかは有益なものとなり得るかも知れぬという希望を抱くようになり、観念的には真理があらゆるものの規範にならねばならないという信念を得て、一応安定はするものの、現実の世界は、

「真理というものは、未知の事象にみちたこの混沌の中では、狂って動かなくなった磁石のようなものですね。」<sup>(32)</sup>

という言葉にうかがえるように、手のつけようもなく、厳として彼の前に存在していた。しかも今度は逆に自らの理想と現実諸相との乖離とがいつそうひどく彼を苦しめることになった。そして、徐々にではあるが自らの経験を通して、叔父の抱いていた自然科学的世界観に基づいた「……生活とは断えざる闘争であり、残酷な狩猟なのだ……」という人生観を認めざるを得なくなっていく、主人公は自ら抱いていた問題を解決しえないままに、ますます厭世的になっていく、彼のこの問題は結局解決されず Alcolea の町の囑託医を経て Madrid での生活に入って、精神的にも肉体的にも困憊の極にあ

---

(31) 註(3)に同じ, Pág. 471.

(32) 註(3)に同じ, Pág. 513.

(33) 註(3)に同じ, Pág. 492.



る時に、しばらく音信の途絶えていた Lulú に町角で出会う。「生命の木」のすさまじい力に圧倒されていた、ひ弱でもの悲しい「知恵の木」である Andrés Hurtado は「聡明で、知的な女性」<sup>(34)</sup> Lulú にかけてなかった愛情を感じ、彼女のうちに自己救済の可能性を見い出して結婚する。結婚後、彼はいっそう厭世的な性格を強め、また二人の生活を他人に乱されたくないという気持も働いて、女中以外の誰にもその生活に介在させず、閉鎖的な生活に入る。そこでやっと精神的平安を得るものの、Lulú の死によってその幸せも崩れ去り、主人公も毒をあおぐ。

「何をなすべきか」という命題実践の場である現実世界は、Andrés Hurtado にとってはあくまでも

「なんらかの理由から、世界がその一番醜い顔を彼に向けているのだと考えていた。

……世界は癲狂院と療養所とがごったになったもののように、彼には思わ<sup>(35)</sup>れた。」

というサン・ファン・デ・ディオス病院のせまい世界で得た実感そのままのものであって、その外部のより広い世界でもその認識は強められこそすれ、何らの修正をうけることはなかった。叔父の言葉通り、この世界は「断えざる闘争」の場、生存競争の場であり、弱肉強食の世界なのだ。あらゆる曲折の後に、観念的で純粋なひとつの人生観を身にまとうようになった Andrés Hurtado にとって、現実世界はしよせん修羅場であり、しかもそれが自然の姿なのだと認めることは耐え難いことであった。現実の愚しくもおぞましい様相にヒステリックな絶叫を浴せつつ、観念の純粋さゆえにかえって彼は厭世観の泥沼へとめりこんでいった。Eugenio G. de Nora は主人公の悲劇の根源を「きびしい道徳上の潔癖さ」と「自らに対しても、他人に対しても真実<sup>(36)</sup>で誠実であろうとする非妥協的ではげしい必然的要求」に帰せしめている。

(34) 註(3)に同じ, Pág. 482.

(35) 註(3)に同じ, Pág. 469.

(36) 註(5)に同じ, Pág. 170.

Andrés Hurtado のこの不幸な生涯から、Ortega y Gasset は幸福論を展開させている。彼は Merimée の言葉を引きつつ、真に生きることは人間自らのもつ行動の可能性を実際行動に移すことであり、生の虚無から生じる憂愁、悲哀、不満は行為への自己存在の全的没入によって解消しようとし、「幸福とは自己の外にあることである。」<sup>(37)</sup> と結論している。

また Ortega y Gasset は、主人公が行動をなすべき場を見い出せず、周囲の世界から乖離し、きのこのように自らによりかかって生活したために、自己存在を没入しうる対象を見い出せず、徒らに生のむなしさのみを知ることになり、そこから彼の死が生じたとしている。そしてその結びで、

「そのような服毒自殺によって、自分自身の問題を解決する代りに、パローハは二十六巻、あるいは二十八巻の作品を書いたのだ。いったんそれらを開けば、何ひとつとして満足出来るものがない世界に対する深刻な倦怠感が洩らすあくびが聞かれる。」<sup>(38)</sup> と述べている。

Ortega y Gasset のいうように、もし主人公が現実世界のうちに自己存在を没入しうる対象を見い出していたら、彼は自殺しなかつただろう。すなわち、作者 Baroja 自身が「かかえていた問題を解決」していたら、この作品は別の展開をみせていたかも知れない。しかし文学というのは、理論では片づかない、人間心理の深層にひそむ得体の知れないものを描き出し、そこから新しい問題提起をなすことはあっても、問題解決の手段、道具とはなりえない。少くとも、「小説はそれ自らのうちに、究極的目的をみい出さなくてはならない。教訓的で道徳的な諸目的は、小説に何ものも付与しない。」<sup>(39)</sup> と述べた Baroja 自身は、自らの小説を思想表明のための忠実な道具と考えていなかったことは確かである。むしろ、Ortega y Gasset の上記の言葉からは、文学批評家としてよりも、思想家としての態度がはっきり伺える。

Andrés Hurtado を自分自身によりかかったきのこのような存在ときめつ

---

(37) 註(1)に同じ, Pág. 82.

(38) 註(1)に同じ, Pág. 83.

(39) 註(2)に同じ, Pág. 1026.

け、自己没却の状態に入れなかった点に、彼の不幸の原因をみい出す以上に大切で有益なことは、彼の不幸の原因が何に由来しているのかということである。我々が Don Quijote を読んだ時、彼の悲喜劇の原因として彼の妄想を考える前に、その内的必然性の悲しさ、人間存在のもつどうにもならない内的な力にうたれる。大切なのは、結果から導き出される解答ではない。それ以前の問題としてある人間存在のもつ必然性なのだ。Andrés Hurtado の内的必然性を考えてみる時、そこに浮んでくるのは先にあげた Eugenio G. de Nora の言葉である。すなわち、主人公の悲劇の根源が「きびしい道徳上の潔癖さ」と「自らに対しても、他人に対しても真実で誠実であろうとする非妥協的ではげしい必然的要求」であると述べた言葉である。

この作品は、思想的な問題を含んでいる点で知的傾向をおび、他方前稿でのべたように、手法的にはナラティブな性格をもっている。このことからして、この作品が二面性を備えていることは明らかである。

先にふれた、主人公の「何をなすべきか」という問題は、彼の真理への渴望と、それを世界の規範に据えようという願いが、根本的な動機となっている。この世界を統べるべき規範に暫定的に、有用性を据えようとした Iturriz の言葉にさからって、それに真理をおこうとした Andrés Hurtado も Alcolea, Madrid, での体験から、この現実世界を絶体的な力で支配しているのが「自然」であることを認めざるを得なくなってゆく。(この「自然」という観念は、十九世紀中葉から自然科学の分野だけでなく、思想分野全体にわたって、大きな影響を及ぼした Darwin の自然科学思想を礎にしたものである。) すなわち、彼はこの現実世界が断えざる闘争の場、生存競争の場であり、そこでは知的存在以前の間人が、生物的な意味での自然状態のうちに生きていることを認めざるをえなくなってゆく。しかも、彼を象徴する「知恵の木」は、生物的な意味での人間を表すたくましい「生命の木」に比べて、弱々しくもの悲しげで常に「生命の木」の力にその存在を脅やかされている。この作品では、真理が有益であり、この世界の規範となりうるかも

知れないと願っている理想主義者 Andrés Hurtado が Darwin 的な自然科学的世界観をいただく Iturrioz に対峙させられており、そこに作者自身の思想上の問題をぶつけている。そういった点に、この作品の知的な傾向が読みとられるし、手法、文体的な面でのナラティブな性格は前稿において指摘しておいた通りである。

作品のもつこのような二面性から、ここに新しい問題が生じてくる。それは、このふたつの性格を作者がどのように融合させているかであり、ひいては先にふれた抽象的命題の小説的転化の成否にも絡んでくる。

この問題に入る前に、多少補足しておきたいことがある。前稿において、この作品では人物が徹底して客観的対象として扱われているとのべた。しかし、このことは描かれた人物自体が客観的普遍性をもつという意味ではない。作中人物の内面描写——この作品では、ほとんど主人公のみに限られているが——を行なう時の作者は、人物の心にある反応をおこさせる外的な刺激、あるいは原因と、その反応の結果だけを叙述する。すなわち、人物の心理の世界に踏みこんで、その内にひめられた心の動きを描写しないのである。次にあげるものは、前稿で原文のままあげたものに一段補足してある。

「Andrés は、自分の人生のほとんどいついかなる時にでも、自分が孤独で余計者なのだという感情を抱いていた。

母の死が、彼の心に大きな空洞と、悲哀を愛するような傾きをのこした。」<sup>(40)</sup>

ここに描かれているのは、主人公の内面的な動きではない。すでにそれを過ぎた後の、いわば定着した静的な内的状態なのだ。ここに示されているのは、その吐息までも聞こえそうな生々しい内面描写ではなく、そういったものを一切捨て去った後の、そっけないほど簡潔な魂の状態と呼びうる描写なのだ。このことから、このような内面描写が、一種の客観的事物の描写に類似した性格を帯びてくる。それゆえに、人物を客観的対象化しているとのべたのであって、このことが直ちに人物全体像そのものが客観的普遍性をもつ

---

(40) 註(3)に同じ, Pág. 451.

ということに結びつかないことは納得されると思う。

さて、上にのべた知的傾向とナラティブな性格がどのように融合されていたのかという問題に入る前に、人物の内面描写についてももう少し詳しくみてゆくことにしよう。恐らく、それによってこの問題がより明確に解決されるはずであるし、また別な問題も明らかにされてゆくはずであるから、

人物の内面描写は、この作品の第一部で最もはっきりした形でなされている。というのは、作者の自己告白が多く、しかも主人公の人物提示にとって大切な部分であるからである。第一部になされている内面描写で、気づくことは、写実的な描写から突然に抽象的な用語の多用された内面描写へと飛躍していることである。例えば、主人公がサン・ファン・デ・ディオス病院での性病の講座に出席した部分をみると、

「サン・ファン・デ・ディオス病院での診察は、ウルタドにとって、新たな気の滅入りと憂鬱の種だった。

病院に通い出してからわずか数日たった後には、アンドレスはショウペンハウエルの厭世観が、ほとんど数学的な真理であると思うようになっていった。世界は癲狂病と療養所とがいっしょになったもののように、彼には思われた、理知的であるということは、ひとつの不幸だった、幸福というのは、<sup>(41)</sup>狂気の無意識状態からしか生じえないものだった。」

となっている。この引用でも判るように、主人公の経験がすぐに抽象化されているこのような現実体験の総括的抽象化によって生じてくる問題は、作者の意図に反して読者は戸惑うことになるという事なのである。試みに、「世界は癲狂院云々」ののところをとりあげても、そこから直ちに「理知的であることはひとつの不幸」であるという帰結に到っているのに目を見張るし、一体どこからそのような結論が出てきているのだろうかと思わざるをえない。少くとも、サン・ファン・デ・ディオス病院での経験をみただけでは、読者はそこまで作者と一緒に飛躍出来ない。また主人公の人生感を語る部分でも、

---

(41) 註(3)に同じ, Pág. 469.

それと同じことが生じている。これは、第一部、第六章 “La sala de disección” 「解剖室」の末尾の部分であるが、

「そのような時を除いて、その他の場合は、勉強、討論、家庭、友人達、彼等との一寸とした旅行、そういったもの一切が彼自身の様々な考えとごったになって、彼の心の中にあるうら悲しい苦々しい印象を与えた。一般に人生は、ことに彼の人生は、醜く、濁った、悲しい、手に負えないもののように思われた。<sup>(42)</sup>」

とある。この文を読んで読者が感じるのは、一体どうして彼の人生がそんなに醜く、濁った、悲しい、手に負えないものなのだろうかということである。この引用部分の手前までは、学生の生活や Andrés Hurtado の生活を写實的に描き出していた作者が前の部分と矛盾しないまでも、どうして突然このように主人公に総括的で抽象的な人生定義を下させているのだろうか。

このふたつの引用以外の所でも、時折なされる主人公の内面描写は抽象化された部分を含んでいる。そういった内面描写の三人称形を一人称形にすると、Andrés Hurtado の仮面がはがれて、Baroja 自身の顔が現われる。すなわち、「彼は」というところを「私は」と変えれば、先に記した回想録に収められた部分になるのである。問題はまさしくこの点にある。上記の引用にみられる文が、エッセイであれば問題なく作者の告白として受け取れよう。だが我々がここで問題にしているのは小説である。勿論、小説の中の人物の内面描写に抽象的な用語を多用してはならないというつもりは毛頭ない。我々は、主人公と共に小説世界にあるが、その人物についてはごく僅かなことしか知ってはいない。彼が様々な思考をめぐらす時、我々はその人物の心の動きを我々自身に転嫁してみても始めて、人物の思考のあとを辿るのである。そのような場合の読者と人物をつなぐ糸ともいべき内面の動きが省かれた時、読者は啞然として、徒らに形而上の世界へと飛翔した主人公を眺めるだけである。

---

(42) 註(3)に同じ, Pág. 460.

小説における人物の内面描写と、エッセイの自己告白とは全く異ったものである。エッセイならば、自らが感じ、考えたこと、あるいはそこから得た結論を生そのままに読者に提示してもよい。しかし、小説はそうではない。その作品が自伝であるとかないとかは問題でなく、ひとつの創作された世界が問題となる。しかも、人物はその世界の中で、現実性をもたねばならない。すなわち、生きた存在でなければならないのだ。Andrés Hurtado があの娼婦を守ろうと医師にやってかかった時、妻 Lulú の終焉を見届けた時、その時の彼は生きていた。彼の憤りが、悲しみが脈うつように伝ってきた。だが、上記の引用文にみられる Andrés は我々から遠くかけ離れている。現実からの徒らな飛翔、心理的必然性を欠いたために、一見客観的な描写にみえながら、その実、作者の主観的な現実抽象化の押しつけになってしまっているのだ。

これは、その手法上のまずさというよりも、むしろ作者自身がここで性急な自己告白をすることにかかりすぎて、それに客観性をもたしえなかったことに由来している。というのは、引用の部分にみられる現実体験の抽象化は、おそらく作者自身の経験から生まれたもので、作者にとってはごく自然な感情的且つ理性的な帰結であったのだ。それが、自分自身にとって自然なものでありすぎたために Andrés Hurtado が小説世界の間人なのだということが忘れ去られてしまったのだ。そのために、読者にとっては、迷惑至極な先のような形而上の世界への飛翔が生れた。結局、第一部の人物提示で最も重要な部分において、作者は人物を自らと隔絶出来ず、作者の主観がそのままの形で主人公に仮託されている。そのため、読者の側からいえば、辿るべき糸である心理の動きが断ちきられて作者の主観的抽象化を押しつけられるという結果になっている。主人公の苦しみが、時として他人事として空しく空回りし、それが読者に実感のこもったものとして伝わらず、一枚のガラスを隔てたあちら側の世界での出来事として観られることになる。

これと同じことが、主人公の浴びせかける鋭い痛罵についても起っている。

Ortega y Gasset はこの作品の中にみられる罵詈から、Teoría del improprio”「悪口論」を書いているが、その中で「……悪口は、……それを用いる時には、……我々の個人的感情を表すだけにすぎない」とのべている。<sup>(43)</sup> 実際に、Andrés Hurtado の浴びせかける痛罵、悪口の中には、その対象の明確な描写もないまま、単なる主観的な感情の発露に終わっているものも少なくない。

作者が主人公を自らと隔絶出来ずに終わったことを最もよく物語っているのは、この作品の末尾の部分であろう。

『苦しまずに亡くなった』と、イツリオスがつぶやいた、『この男には、もう生きゆてくだけの力がなかった。彼は、一個のエピキュリアンだった、貴族だった。自分ではそうと思ってはいなかったが』

『でも、彼にはどこか先覚者的なところがありましたね』と、もうひとりの医者がつぶやいた。<sup>(44)</sup>

この引用文で問題になるのが、「でも、彼にはどこか先覚者的なところがありましたね。」という言葉である。というのも、第四部まで見られた内面描写や形而上的な議論が、第五部以降ではほとんどみられず、第六部で主人公とその叔父との対話に表われてはいるが、それほど重要ではない。すなわち、第五部以降では、作者はナラティブな世界が展開させてゆく。そして、第六部での、主人公と Lulú の再会の後は、その二人の絡み合いが軸になり、二人の結婚、幸せな生活、Lulú の妊娠、死産、破局と息もつかせぬ筆致で生き生きと描き出し、そのナラティブな手法を遺憾なく発揮しているのだが、結末のこの文が、前との脈絡を欠いているのである。しかも、いっそう判らなくしているのは、それまで全く関係のなかった主人公とその叔父の友人という人物が、その言葉をのべていることである。（この人物は終りの部の、終りの章に初めて登場している。）しかし、誰がいった言葉なのかということにと捉われずに、そのままこの言葉をうけとめてみると、やはり第四部に戻

---

(43) 註(1)に同じ, Pág. 107.

(44) 註(3)に同じ, Pág. 569.



ることになるが、真理がこの世界の規範になるようにと願っていた理想主義者、Andrés Hurtado に与えられたものだという事は確かである。またこの言葉は叔父 Iturriz が言ったにしても、何ら不自然ではない。そうなのだ、これは作者自らが主人公に与えたものなのだから。

このことはすなわち、作者が最後まで主人公を自分から切り離せず、あの医師の言葉の底に自らの感傷を託したということを物語っている。

作者はこの作品において、自己の内面をさらけ出し、そこにひとつのフィクションの世界を作り上げている。その世界の中の人物である Andrés Hurtado を通じて、人間存在のもつ悲しい内的必然性が描き出されていること、及び作品自体が作者の実体験に裏付けされていることによって、ずっしりとした重みをもっているというふたつの長所をこの作品は備えている。ただ、先にも述べたように、これらの長所も客観性を欠いているという欠点のために、その価値を大きく減じている。先に、作者と主人公とがあまりにも重なり合いすぎていることが、この作品の限界となっているとのべたのはこのことを指すのであり、結果的には、作者が人物に十分な客観性を付与出来なかったという一点に帰着する。

この作品は、Camino de perfección「完成の道」(1902年)と共に、見過されやすい Baroja の一面、すなわち理知的な一面をはっきりと物語っている作品であることは疑い得えない。このことと、先に挙げた Azorín の引用文において指摘されていた、Baroja の精神を最もよく要約した作品であるという言葉を考え合わせれば、「知恵の木」という作品は彼の代表作のひとつに数えられるにしても、すでに述べてきたようなことからして、最上の作品であるとはいえない。

了